

## 不破敬一郎先生を偲ぶ

1925年8月東京都に生まれる。1948年東京大学理学部化学科を卒業。同大学院を経て1951年同大学助手。1954年理学博士。1955年フルブライト留学生として渡米。アーカンソー大学を経て、ハーバード大学医学部B. L. Vallee教授のもとで研究に従事。1968年東京大学農学部農芸化学科教授。1975年同理学部化学科教授。また、1974年より国立公害研究所計測技術部長を兼任する。1986年東京大学退官。同名誉教授。1985年国立公害研究所副所長。1988年～1990年同所長。その後、財団法人分析センター会長、国連大学顧問などを歴任。1991年度本会会長、環境科学会初代会長・名誉会員、日本微量元素学会名誉会員。1976年本会学会賞、1983年地球化学研究協会学術賞を受賞。2005年瑞宝中綬章を受章。



2017年12月17日に不破敬一郎先生が92歳でご逝去された。天寿を全うされたとはいえ、突然の訃報に、不肖の弟子の私にとっていまだに整理がつかない状況である。しかし、先生の紹介を改めてさせていただきたい。

先生は東京で誕生されたが、幼少期を鎌倉と京城（ソウル）ですごされた。先生は、父君は法学者で劇作家の木下順二氏は叔父上であるなど、大変知的な環境で成長された。先生の幅広い教養と人間そのものへの関心はこうした環境で養われたと思われる。また、幼少期を京城で過ごされたことも先生に大きな影響を与えたであろう。ここで先生は生涯のご趣味であった蝶の採集を始められるとともに、後年米国で活躍される素地が自然に養われたと思われる。

先生は、福岡で中学、高校時代（旧制）を過ごされたのち、東京大学理学部化学科に進まれた。父君の早世により、一旦は学問の道をあきらめたとのことであるが、周囲の勧めと援助により研究生生活を続けられた。1955年にフルブライト留学生として渡米されたことが、その後の先生の人生を大きく変えることになった。当時、先生の先輩の黒田和夫先生がおられたアーカンソー大学を経て、ハーバード大学医学部のB. L. Vallee教授のもとで、1968年に東京大学農学部教授として帰国するまでの14年間の長きにわたり、米国で過ごされたのである。

Vallee教授は医学者で、Zn含有酵素研究で有名な生物無機化学の創始者の一人であるが、まずは金属元素の定量法の開発が不可欠との認識から、研究室に優秀な分析化学者を集められた。先生もその一人であった。先生は当時勃興期にあった原子吸光法にいち早く着目したが、市販装置では満足な感度が得られなかった。そこで開発されたのが、先生の名を国際的に不動のものとしたFuwa-Vallee長光路吸収管原子吸光法であった。これは全噴霧型のバーナーの炎を長いガラス管の中に吹き込み、それを長軸方向から観察するという方法で、Znなどの金属元素定量の高感度化に絶大な威力を発揮した。この方法は、他の分光分析化学者に大きなインパクトを与えると同時に、当時の生物無機化学の発展に多大な貢献をした。先生は、自らを無機分析化学者と定義し、化学の中で最も基礎的な学問を行う研究者であると終生誇りにされていたが、先生はまさに金属元素の生物中での役割を解明するための基礎を築かれたのである。

日本に帰国されてからの先生は、東大農学部、また1975年からは理学部において研究室を主宰された。構成員のバックグラウンドも考慮されたのであろう。農学部ではより生物無機化学に、理学部においてはより分光分析化学に軸足を置いた研究室運営であったと思う。さらに1974年からは国立公害研究所（当時）計測技術部長を兼任された。部長就任に当たって、親友の井口洋夫先生から「君は、例えば、人間は微量の水銀を吸って

なければ生きていられないことを証明すればよいのだ」と就任の説得を受けたとのことである。これは、まさに先生の研究方針であったと思う。先生は、米国での経験と人脈を生かし、多くの共同研究者とともに、日本の分析化学、特に、原子スペクトル分析分野、さらに勃興期の環境科学の発展に力を尽くされ、大きな成果をあげられた。そして、多方面で活躍する多くの後進を育てられた。

さて、私は理学部の研究室一期生6人の、特にその中で博士課程までお世話になった3人の中の一人である。先生はお身体そのものごとく悠揚迫らぬ大人物であった。長い米国生活のためか「お元気ですか」、「enjoyしてますか」など、直訳風で英語交じりの挨拶をされた。特に後者は先生のキーワードの一つで、先生ご自身も奥様とともにゴルフなどのご趣味を大いに楽しまれた。もちろん、先生の「enjoy」の中には研究も含まれていたが、我々3人は、これを勝手に狭義に解釈し4人とするゲームなどに熱中したため、農学部の諸先輩から「理学部の3バカトリオ」というありがたい称号を頂戴したりした。先生は常に問題の本質を鋭く指摘され、真実を述べられる方であったが、一方で学生に向かって「人生の要諦はDon't tell the truthである」と謎のような言葉もおっしゃられた。後年、私は若さにまかせてより真実を主張することにより、年上の先生を傷つけてしまったことがあった。この時、先生のこの言葉が、真実は時として人間にとって耐えがたいほど残酷であることをよく認識せよ、とのご忠告であったのではと思ひ至った。先生はかくも周到で優しい方であった。先生は終生米国の生活と文化をこよなく愛しておられたが、一方で、米国では様々なご苦勞をされたに違いない。そのためか、先生は、厳しい面もお持ちであったが、寛容で公平な方であった。大きな失敗をしても、最終的には「しょうがないなあ」という笑顔で励ましてくださった。私自身、先生のこの笑顔に何度となく救われ、また励まされてきたが、こうした経験は決して私だけのものではなかったと思う。

このように、私にとって先生に出会えたことは、人生の大きな幸運であったが、先生にとってはとんだ厄介な不肖の弟子の一人であったに違いない。ここに生前におかけした数々のご迷惑をお詫び申し上げるとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。先生は天国で数年前に亡くなられた最愛の篤子夫人とともにゆっくりゴルフを楽しまれているに違いない。合掌。

〔群馬大学教授 角田欣一〕